

研究紀要の様式

中学校 特別活動部会

部会長名 大任町立大任中学校 校長 長崎 克吉

実践者名 香春町立香春思永館 教諭 田中 章訓

1 研究主題

自主性と実践力を育てる文化祭の取組
～目的を明らかにし、目標意識を高める取組～

2 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

経済や文化のグローバル化や人工知能（AI）の進展、働き方や生活様式の多様化などにより、社会は急速に変化している。また、地域や社会における人と人との日常的なかわりやふれあいの機会が減少し、人間関係の希薄化に伴う様々な課題が指摘されている。生徒たちが将来社会で活躍する頃には、これまで以上に予測困難な状況が考えられるため、なお一層他者と協働しながら課題に対応していく力が求められる。このような社会においては、知識や情報の活用、単純作業といった分野などは人工知能に代替される一方で、集団の中で自分の役割を自覚し、他者と関わり合いながらよりよい人間関係を築く力や、互いの考えを尊重し合意形成を図る力、思いやりや責任感といった人としての在り方がより一層重要となる。

特別活動は、生徒が学級や学校生活における課題を自分事として捉え、話し合い、実践し、振り返るという一連の活動を通して、主体的・実践的な態度育成を目的としている。そこで、生徒一人一人が学級の一員としての自覚を高め、集団活動や体験的な活動を通して、よりよい生活や人間関係を築こうとする力の育成が必要であると考え、本主題を設定した。

(2) 学校教育目標・目指す生徒像から

[学校教育目標]

母校やふるさとを愛し、ともに学び、鍛え、自己の可能性に挑戦し続ける児童生徒の育成

[めざす生徒像]

目標のために、自ら学び、鍛える児童生徒

自他を尊重し、ともに高め合う児童生徒

母校やふるさとの伝統・文化を大切にする

(3) 生徒の実態

本学級の構成は男子 11 名、女子 16 名の計 27 名である。特徴として、7 年間同じ学年集団で生活しているため、人間関係が既に固定化しており、日常的な関わり合いが安定している一方で、新たな友人関係を築くことは苦手とする生徒の姿が見られる。また、前年度の合唱コンクールにおいては思い通りの成果を出せず悔しい思いをした経験から、合唱コンクールに対して、苦手意識や不安感を抱いている生徒が多い。そのため、合唱に対する苦手意識を軽減し、協力して行事等に取り組む力を育てる支援が必要である。

研究紀要の様式

3 主題の意味

(1) 「自主性と実践力を育てる文化祭の取組」とは、文化祭という活動を通して、さまざまな取り組みにおいて当事者としての自覚をもち、自ら進んで集団での活動に参加し、他の生徒と協力して取り組む姿勢を身につけることである。

(2) 副主題の意味

「目的を明らかにし、目標意識を高める取組」とは、文化祭活動においてまず活動の目的や意図を明確に示すことで、生徒が何を達成すべきかを理解できるようにし、そのうえで目的を達成するためにはどのように行動すべきかを考えながら具体的な目標を設定させ、その目標を自分たちの係や役割の内容と結びつけて取り組ませる活動である。

4 研究の目標

合唱コンクールに向けた課題設定と目標設定が、生徒の自覚や学習意欲にどのような影響を与えるかを明らかにする。

5 研究仮説

難易度の高い課題と明確な目標を設定することにより、生徒一人一人の自覚が高まり、クラス全体の団結力の向上につながるであろう。

6 研究の計画(授業の計画)

(1) 単元「みんなで創る！心がひとつになる合唱へ」

(2) 単元(題材等)の目標及び指導計画

| | 生徒の活動 | 指導上の留意点 | 日時 |
|-------|---|--|-----|
| 事前の指導 | ○学級会に向けて、司会グループの打合せ・学級の現状の共有・役割割分担・話し合いの進め方の確認する。 | 夏休みが迫り心が緩みがちなこの時期だからこそ、2学期に向けて意識をしっかりと高めていくことの大切さを伝える。 | 放課後 |
| | 昨年度の合唱コンクールについてのアンケートを実施する。 | | 終礼 |
| | アンケートの結果から教員と中央委員で議題を決定し、課題曲と学級スローガンに対して情報を共有する。 | | 放課後 |

研究紀要の様式

| | | | |
|-------|--|---|------|
| 本時 | <p>学級会</p> <p>柱(1) 友達と協同し、高め合い、上級生に挑戦するスローガンを考える</p> <p>柱(2) 課題曲の決定</p> <p>柱(3) 課題曲に対して合意形成する</p> | <p>ほとんどの生徒が悔しい思いを抱いている現状を丁寧に伝えた上で、学級スローガン(目標設定)がその状況を打破するための指針となることをしっかりと示し、その後、課題曲(課題設定)の選択について、挑戦意欲が喚起されるように説明する。</p> | 6/27 |
| 事後の指導 | <p>1 準備、活動を行う。</p> <p>2 毎日の活動の振り返りを行う。</p> <p>3 文化祭で合唱する。</p> <p>4 キャリアパスポートで、音楽学習発表会の取り組み方や学びについて振り返りを行う。</p> | <p>課題曲「名づけられた葉」の歌詞から、ポプラの木の掲示物を作り、生徒たちの思いを書かせる。</p> | |

7 活動展開計画

| 学級会の計画 令和7年6月27日(金曜日) | | |
|---|---|------|
| <p>[議題]</p> <p>「友達と協同し、高め合い、上級生に挑戦するようなスローガンを考え、課題曲を決定する」</p> <p>[提案理由]</p> <p>事前アンケートから昨年度の合唱コンクールの経験を通して、多くの生徒たちが合唱に対しての意欲を失っていると感じた。しかし、合唱コンクールで金賞を取りたいという意欲を持っている生徒もいる。そこで、学級で上級生に挑戦するようなスローガンをみんなで決定し、挑戦するような課題曲を選ぶことで生徒の協働し、高め合う心を育てたい。</p> | | |
| 主な活動内容 | 指導上の留意点 | 評価基準 |
| <p>1 始めの言葉</p> <p>2 司会グループの紹介</p> <p>3 議題の確認と提案理由</p> <p>4 めあてと話合いのルールの共有</p> | <p>事前アンケートの結果を伝え、担任として合唱コンクールへの想いを伝え、生徒たちが選ぶスローガンが、課題に向き合うものになるように説明する。</p> | |

研究紀要の様式

| | | |
|---|---|--|
| <p>5 議題について話し合う。 〔柱1〕 上級生に挑戦する スローガンを考える。 (1) 個人で考える。 (2) 班で理由と共に考える。 (3) 全体で共有する。 〔柱2〕 課題曲の決定 (3) 課題曲に対して合意形成する。</p> <p>6 先生の話</p> <p>7 終わりの言葉</p> | <p>課題曲の決定では、学級スローガンを意識するように伝える。 課題曲に対して、学級スローガンと課題曲が合っているかの合意形成をする。</p> | <p>音楽学習発表会スローガンと課題曲を他者と協働して合意形成したり、意思決定したりすることができる。 (思考力、判断力、表現力等)</p> |
|---|---|--|

8 研究のまとめ

○難易度の高い課題設定が生徒たち一人一人の自覚が高まり、それが団結に結び付いた。
○学級スローガン（目標設定）を集団で決定したことにより、生徒たちの主体性が強化され、自身の目標や学級のルールについて具体的な考えを深めることができた。そのため、以降の練習にも意欲的かつ円滑に取り組むことができた。

9 成果と今後の課題

(1) 成果

令和7年度合唱コンクールにおいて、スローガン「下剋上」を掲げ、より高い目標に向かって挑戦する姿勢を重視した取組を行った。その結果、難易度の高い課題曲を選択し、多くの時間と意識をかけて練習を積み重ねたことで、金賞を受賞することができた。これは、スローガンに基づき生徒が自らの限界を超える努力を継続した成果であり、パートを超えた協力関係ならびに主体的な取り組みが育まれたことを示している。加えて、本取組を通じて生徒の意識面での変容が認められた。目標設定の段階で全員が意見を出し合い、合唱の共通理解を形成する過程により、自己効力感と集団としての一体感が向上した。また、日々の練習を通して「自分たちで目標を達成しようとする姿勢」が強まり、他者への思いやりや互いの努力を認め合う文化の醸成にもつながった。

(2) 課題

① [意欲・参加態度の個人差]

スローガン「下剋上」に賛同し熱心に取り組む生徒も多かった一方で、合唱活動への参加意欲や練習への自主性に個人差が見られた。これは、合唱コンクールに対する価値観や時間の使い方に対する生徒間の捉え方の違いによるものであることが分かった。全体としての練習への一体感を高める工夫が今後必要である。

研究紀要の様式

② [集団内のコミュニケーション強化]

本番に向けた意思統一や役割分担については、日々改善が進んだものの、練習中の意見交換や振り返りの場が十分に機能しない場面があった。特に、自分の意見を発言することにためらいがある生徒や、他者の意見を受け止める態度が十分に育まれない場面が見られた。こうしたコミュニケーションの課題は、集団としての合意形成や目標達成に影響を与える可能性があるため、日常的な話し合いの機会や振り返りの質を高める指導が求められる。

③ [振り返りと内発的動機付けの定着]

受賞という成果を得た後、生徒自身の振り返り活動を体系的に実施することが十分には定着しなかった。成果の要因や苦勞した点を自ら整理し、次の活動に生かすための振り返りの仕組みづくりと内発的動機付けの促進が必要である。

◎ 参考文献 「中学校学習指導要領 特別活動編」 (文部科学省)